

洞窟壁画レプリカ展示博物館の調査研究

小川 勝

(キーワード：洞窟壁画，レプリカ，アルタミラ，ラスコー，コスケール)

はじめに

筆者は既に40年以上にわたって、ヨーロッパ西部に分布する、後期旧石器時代に制作された洞窟壁画を研究しているが、もちろん、美術研究に従事する者としては、作者が制作したオリジナルの实物を直接的に調査するのが基本である。しかし、約3万5千年前から約1万年前にかけて制作された洞窟壁画は、人類の最古のまとまった芸術作品群として、極めて貴重であり、将来の世代にできる限り現状維持して保存してゆかなくてはならない。文化財は、一般にも公開して、その意義を広く理解されることが基本だが、後述のとおり、人々の存在そのものが、遺跡に対して破壊的な場合もあり、一般公開はもとより、専門家による調査研究も制限されることがあるのは、仕方のないところだろう。それで、作品のある洞窟への入洞を制限あるいは禁止して、その代わりに、精巧なレプリカを作製して一般公開することが行われるようになっていく。

筆者はこれまで、オリジナルの洞窟壁画遺跡を調査するにあたって、折に触れて、各地にあるレプリカを展示する施設を観覧してきた。また、アルタミラ大天井画の調査では、研究目的の精度にもよるが、筆者は次善の策として、実際にレプリカでデータ収集した経験がある。(注1) この場合、顔料などのオリジナルのデータの分析ではなく、不規則な岩面の形状と制作されたかたちの一致について調べたので、レプリカでもほぼ遜色のない資料とすることができた、と筆者としては考えている。このほど、2022年に開設された、本論で紹介するコスケールのレプリカ展示施設などに、機会を得て訪問することができた。本稿は、レプリカ作製の過程と公開の実際を明らかにすることにより、レプリカ展示の研究史上の意義を明らかにしようとする試みである。

先史岩面画としての洞窟壁画

洞窟壁画は美術ジャンルとしては先史岩面画という範疇に属している。先史岩面画とは、文字を使用していなかった時代に、自然の凹凸や亀裂に富んだ岩面に直接に刻線したり彩画したりして、かたちを作り出すものであり、世界各地に残されている。レプリカ作製という観点からは、自然の岩面を平面などに均すことなく制作していることが最初の難題になることを指摘しなければならない。自然の岩面の形状は、何千万年というきわめて長い時間の流れの中で、もとの岩質や風化の状況など、様々な要素が複雑に絡み合っ、全く同じものがない。レプリカを作製するためには、その岩面の形状を正確に再現する必要がある、それは困難を極めるだろう。

一般の絵画などは、幾何学的二次元平面に制作されており、レプリカ作製に際し、支持体の材質はできる限り同じものを使うべきだが、それほど留意すべき問題ではない。徳島県鳴門市に所在する大塚国際美術館は、陶板に焼き付けた実物大のレプリカを展示している施設だが、オリジナルが漆喰の壁であろうと、キャンバスという布地であろうと、それは本質的な問題とはならないだろう。一方、先史岩面画は、その支持体の一つとして同じものがない形状が作品存在の基本的な条件となっていて、それを再現しないことには、決してレプリカとはいえないのである。一例として、図1のアルタミラ洞窟壁画の大天井画部分を見るが、ここで示した岩面の起伏のみを示す図2では、形状が極めて複雑で、その突起部分などに動物像が制作されていることが分かるだろう。

この先史岩面画の本質的特徴により、洞窟壁画のレプリカ作製は極めて難しく、これまであまり多くの試みがされてこなかったが、本論で紹介するとおり、デジタル技術の進展に伴い、近年になって増えてきており、以降、オリジナルの発見順にレプリカ作製の理由とその実情を明らかにしてゆく。

アルタミラ Altamira

1879年にスペイン北部のサンティジャーナ・デル・マール近郊で発見されたアルタミラは、存在が全く予想もされなかった、真の科学的大発見であり、それが本当に約1万年以前の制作であると公的に認定されたのは、23年後の20世紀に入った、1902年のことだった。(図3) 1918年からは一般公開されたが、徐々に人数制限が行われ、その後、調査のために完全に閉鎖されたこともあったが、現在は1週間に5名という最小限の公開状況となっている。もっとも、2023年現在においては、ウエイティング・リストへの募集は停止しているとのことである。(注2)

1928年にはアメリカ合衆国のフィールド自然史博物館(シカゴ)で展示するためのレプリカ作製が試みられたが、これは、やはり技術的な問題により、実現には至らなかった。第2次世界大戦後の1959年にドイツ博物館(ミュンヘン)のPietsch夫妻(Erich 1902-1979, Gisela 1917-1996)によりレプリカ作製の提案がされ、作品への直接接触は禁じられたため、写真計測法により作製が進められ、1962年には完成し、同博物館で公開された。(注3)(図4) これには当時の最先端の技術を披瀝する意味があっただろうし、洞窟壁画の最初のレプリカとしてその歴史的意義は大きいものがあるといえる。

2年後の1964年には、同じ原型から作製したレプリカがスペインに贈呈され、それは、首都マドリードの中心部にある国立考古学博物館の前庭に設置された。(図5) これに関しては、オリジナルが首都から数百キロの距離にあるため、レプリカがあれば、より多くの人々に、スペインの宝でもある、人類の文化遺産を観覧してもらえるという意義があるだろう。入場は現在でも無料で、博物館がオープンしている時間帯には、門から入ってすぐ左にある入り口を下ってゆくと、アルタミラ大天井画の実物大のレプリカに出会える。(図6)

アルタミラのオリジナルの入場は厳しく制限されるようになり、すぐ近くにレプリカを展示する博物館の建設が構想されるようになった。その際、スペイン独自の技術で作製を試みたが、その過程で、そのテスト版とでもいべきレプリカが、スペインから遠く離れた極東の日本で設置されることになった。三重県に志摩スペイン村というテーマパークが1994年にオープンしたが、その中のハビエル博物館に展示されたのである。博物館内の展示室のサイズの問題か、大天井画の全体ではなく、奥の牝ジカの部分など、一部カットされた状態のレプリカであることは残念だが、最新の技術が駆使された精巧なレプリカをオリジナルから遠く離れた土地で経験できることの意義は計り知れないだろう。(図7) レプリカのある部屋の壁面には、レプリカ全体を作製するにあたっての実物大のテストピースも展示されていて、試行錯誤の痕跡が見てとれる。なぜ、日本なのか、という疑問には、このレプリカ・プロジェクトに志摩スペイン村を運営する近畿日本鉄道という私企業が、1990年頃のバブル経済のもと、資金援助をしたというのが答えになるだろう。

スペイン村でのパイロット版の展示をふまえて、2001年にアルタミラ洞窟のすぐ横の場所にオープンした国立アルタミラ博物館に「新洞窟(neo cueva)」という名前で設置された。(図8) この場合、オリジナルへの入場が困難であるため、洞窟のあるサンティジャーナ・デル・マールを訪れた観光客が、精巧なレプリカを経験できることには十分な意義があるだろう。何より約1万5千年前の人間が、実際に洞窟壁画を制作した場所の風土を経験し、またレプリカと同時に、最新の調査研究の成果の展示にも接することができ、十分な意義があるだろう。なお、後述のとおり、ラスコーでも、オリジナルのすぐ側に、最初のレプリカが早くも1983年に設置されており、風土も経験できる施設の先駆となるが、ラスコーの場合、レプリカだけで、博物館施設は伴っておらず、そういう意味では、総合的なレプリカ展示施設としての価値はあるだろう。ラスコーでも、後述のとおり、2016年にはラスコー4という同等の施設が開館しており、風土の中のレプリカと展示施設というセットが近年のトレンドとはいえるだろう。

ニオー Niaux

ニオー洞窟は1905年に洞窟壁画のあるのが発見されたが、洞窟それ自体は歴史時代を通じて、その存在が認識されており、洞内には1500年代の落書きも発見されている。長さ数キロにも及ぶ広大な洞窟であり、内部に照明施設などはないが、現在に至るまで、人数制限はあるものの、一般公開されており、レプリカを作製する意味はどこにあるのだろうか、考えなければならない。ニオーの作品自体は、ピゾンなどの動物像に矢印ともいえる「記号」が書き加えられており、常識ともいえる解釈である「呪術説」の格好の事例としてみなされている。(図9)

ニオー近くの、鉄道が通る町であるタラスコン=シュル=アリエージュ近郊には、「先史公園」が1994年にオー

ブンし、広大な敷地の中に、簡易テントなど先史時代の生活を追体験できる施設などが散在している。(図10) 本館にはニオーの「サロン・ノワール (黒の部屋)」の主要作品の実物大レプリカが設置されており、オリジナルの洞窟に入場者数制限があるという点からは、気軽に注目すべき洞窟壁画を鑑賞できることには一定の意味があるだろう。(図11) 他に、1970年に、ニオーの支洞で、水没した地中トンネルの先に発見され、一般公開されていない「レゾー・クラストル」の作品や、ピレネー地方の、一般未公開のマルスーラス洞窟の作品のレプリカが設置されているのは、意義深いことだといえるだろう。マルスーラスでは、発掘が1883年に開始され、1897年には洞窟壁画が発見されていたが、その位置づけが明確ではなく、アルタミラの認定と同時の1902年に後期旧石器時代の所産であると認識された。約1万8千年前の制作と考えられているマルスーラスの作品の中では、ドットの集積によりボリュームを巧みに表現したビゾンが注目され、その実物大のレプリカが経験できることには意味があると思われる。(図12)

ラスコー Lascaux

ラスコーは第2次世界大戦開戦後の1940年にフランス南西部ドルドーニュ県のモンティニャック村の近くの丘で発見されたが、現在に至るまで、洞窟壁画の最高峰の位置を譲っておらず、その芸術性は、人類の制作したあらゆる美術作品の頂点に立っていると、筆者は評価している。(注4) 戦後の1948年に公開が始まり、それから15年間、人数制限は厳しくなったが、基本的に観光施設として、多くの人々を迎え入れ、結果的に、その保存状況に深刻な影響を与えてしまった。(図13) 最初は人間が持ち込んだカビ類が繁茂する「緑の病気」が発生し、その場合は注意深く除去することもできたが、その後、人間が吐く息に含まれる二酸化炭素が鍾乳洞の石灰岩と化学的に反応して、岩面の表面が溶けて、作品を重要な一部である顔料が流れ落ちるといふ、極めて深刻な「白の病気」が認識され、最終的に当時の文化大臣であった、文学者のマルローの決定によって、1963年に一般公開が禁止された。図13は「白の病気」が見られた「二角獣」であり、その首の後ろの部分の細部写真である図14では、支持体である石灰岩が二酸化炭素と反応して、溶け出した痕が白い部分として写っている。(注5)

その後は、もとより鉄道も通っていなかった村を訪れる人々は少なくなり、地元ドルドーニュ県は危機感を覚えて、オリジナルの洞窟のすぐ側に、部分的ではあるがレプリカを作製して、設置することにした。即ち、観光振興が目的ではあったが、先駆けていたアルタミラとは異なり、オリジナルから約200メートルの近い場所に設置したことに意味があっただろう。それは、観光客が去ってから20年後の1983年に公開された。(図15)

丘をくりぬいて洞窟を掘り、不規則な形状をまず並列させた板で大まかに作り、そこから金網を張り巡らしてモルタルを吹き付けて、穴の内側にオリジナルとほぼ同じの不規則な形状の岩面を作って、最終的に微調整して、再現したのである。(図16) そこに画像に忠実な作品を、スライド投影するなどして、手作業で完成させたのである。ラスコーⅡと称されたこのレプリカは、人間の手によって最終的に完成されており、それを担当したのが、画家、モニーク・ペイトラル(Monique Peytral, 1926-2020)だった。(図17) 午前中にはオリジナルを仔細に観察し、午後にレプリカを完成させるという手法により、ラスコーⅡは実現したのだが、オリジナルのすぐ近くに設置したからこそ、常にフィードバックしてレプリカ完成に至ったのである。(注6) そこには、人間的な要素が満ちており、デジタル的にいかに精巧なレプリカであろうと、もとのオリジナルは人間が作ったものであり、レプリカであっても、人間の手によってしか作り出せない、まさにアナログによる芸術性というべきものが見出されるのではないかと、芸術学徒として、筆者は評価している。レプリカとは何か、という問いに根本的に答える事例ともなっており、人間の作った、ある意味完全にデジタル化できない事物は、一回性のものとして、レプリカも一回性を身に纏っているからこそ、類似の芸術的経験をもたらすのではないだろうか。

ラスコーⅡは主洞とそこから直線的につながる奥洞の部分のみのレプリカではあるが、際立つ彩画の約8割をカバーしており、その洞窟内部の雰囲気までも再現した空間の中で、人類最高の芸術の一つを満喫できるだろう。

(図18) 他の部分の印象的な「川を渡る5頭のシカの頭部」、「井の情景」などは、数キロ離れたトナック(Thonac)という地区に1972年には開設されていたル・トー(Le Thot)クロマニヨン・センター(先史公園)のパピリオンの中にレプリカが設置されており、それが補完しているといえるだろう。(図19) この先史公園には、洞窟壁画のモチーフになったステップ・バイソン(野牛)の後裔の系列に連なるヨーロッパ・バイソンが飼育されている。

(図20) この動物を観察することにより、洞窟壁画への理解が深まるだろう。ヨーロッパ・バイソンはスペインの首都マドリードの動物園でも公開されている。

なお、2009年からは、ラスコーⅡは、上記の画家、ペイトラルの主導のもと、数人のアーティストが参加して、

修復されることになった。(図21) ラスコーのオリジナルは、2万年近くにわたって、未だ科学的に解明されていない原理によって、鮮烈に保存されているが、近代になって人間が作ったレプリカは、劣化を免れることができず、修復を必要とするという現状も皮肉なことではあるだろう。(注7) 近年盛んに作製されている洞窟壁画のレプリカも、数十年単位で修復が必要となるだろうが、それを怠らず、レプリカもまた文化財として未来の世代に残してゆかなければならないだろう。

さて、モンティニャックはその後2020年に「モンティニャック・ラスコー」と村名を正式に変更した。それほど、古代ローマ時代以来の長い歴史を持つ村にとっても、ラスコーの存在感が強烈だということだろう。1996年にはモンティニャックにレプリカ制作の会社が創立され、そこにドルドーニュ県が2種類のレプリカ作製を発注した。ラスコー3とラスコー4である。(注8) その会社の責任者はラスコーIIにおいても、最後の仕上げを担当したということで、そのノウハウを生かして、地元のモンティニャックに工房を構えたようである。既にラスコーIIが稼働していたこともあり、まずは、移動可能なレプリカの作製を企図し、それがラスコー3として2012年に巡回展を開始し、日本においては、2017年に東京都台東区の国立科学博物館、宮城県多賀城市の県立東北歴史博物館、福岡県太宰府市の九州国立博物館の3ヵ所で特別展が開催された。(図22・23) パリをはじめとする世界各国の展示では、レプリカが主体であったが、わが国では、フランスの博物館などから借り出して、オリジナルの先史美術・小彫像なども併せて展示して、より充実した展覧会になっていたことは特筆すべきところである。(注9)

ラスコー3のレプリカとしての特色は、移動のために軽量化を図るため、高品質の樹脂を用いており、設置も比較的容易である。図24はラスコー洞窟それ自体の形状をデジタル的に縮小再現したものを外側から撮った写真で、展覧会では、このようにデジタルで洞窟壁画の壁面を把握していることを示していた。とはいえ、各都市の博物館などの中で展示するため、洞窟の形状をそのまま再現することはできず、作品の集中している、ひとまとまりの部分を観覧者の見やすいように置いてあるような状態で、残念ながら臨場感には乏しいといわざるをえない。岩面の形状は、精密レーザー計測とデジタル的な作製により、極めて正確であり、作品の再現もほとんどが自動的な装置によりなされているが、仕上げは人間によるリタッチを施しており、そこには芸術作品のレプリカとしてアナログ的な要素も認められるだろう。美術作品は細部ももちろん重要であり、その細部まではデジタル的再現では不十分なことも多く、敢えて見え方を強調するため、リタッチが施されるのも認めざるをえないだろう。(図25) 上記、鳴門市の大塚国際美術館においても、人物の表情などは、現在のアーティストによってリタッチされていることは、銘記しておく必要があるだろう。

ラスコー4はラスコー3と平行して、同じデータから作製されており、モンティニャック・ラスコー村の、ラスコー洞窟へと至る道沿いに建築の完成を待って、2016年に公開された。図26は2023年6月現在の外観であり、完成前には、近くのアトリエで作製したレプリカを建設中の建物に搬入してしており、図27はその光景を示している。図28は現在の展示風景の一例で、これは基本的にはラスコー3と全く変わらない。一方、レプリカの他にも、図29のようなマルチ・メディアによる双方向的な展示は、ラスコー3にはなかった施設である。何よりも常設展であることに意義があり、上でも述べたアルタミラ博物館と同様、オリジナルのある風土を経験しつつ、レプリカだけではなく、博物館としての資料展示があり、総合的に洞窟壁画の何たるかを知ることができるだろう。

(図30) 修復もされ、より洞窟の臨場感を保っているラスコーIIも引き続き公開されている中、ラスコー4の最新の情報を開示した、最先端の展示も意義深いだろう。(注10)

なお、ラスコーのオリジナルは2008年に閉鎖され、それ以降は、調査済みということで、ラスコー洞窟壁画の専門書を出版している研究者も含めて、誰も立ち入ることができていない。年に数回、管理者が、洞内の状況をモニターするにとどまっており、今後とも、公開される見通しは立っていない。2万年近く地中で人知れず眠っていて、80年ほど前に偶然に発見され、しばらくは多くの人の眼に触れたが、保存状況が危機的に陥り、再び永遠の眠りについたらのも仕方ないところだろう。文化財の公開と保存は、答えの見つからない永遠のテーマであり、人間存在それ自体が遺跡には破壊的存在である以上、制限されるのは当然だろう。まだ科学的に解明されていないプロセスで、自然が洞窟壁画を1万年以上ほぼそのままの姿で残してきた以上、現在の我々は、それを間近に見たいというエゴを貫くのではなく、今後、人類が存続する限り、ラスコー洞窟壁画が地中に存在しつづけることを目指さなければならない。筆者は上でも述べているとおり、ラスコー洞窟壁画を人類が作り出した最高の美術作品であると評価しているが、それを損なわないことが何よりも大切なのである。オリジナルへのアクセスが遮断されている以上、レプリカの存在価値は増すのであり、それを通して、遙か昔のアーティストたちの営為に思いをいたすのである。

コスケール Cosquer

フランス南部、地中海沿岸で1991年に発見されたコスケールは、極めて特異な状況にある洞窟壁画である。発見者は近隣のカシスという町でダイビングスクールを経営するアンリ・コスケール氏だったが、遺跡それ自体は大都市マルセイユ市の行政区域内に位置する。洞口は現在の海面下37メートルにあるが、約2万年前の氷河時代の最寒期には現在より120メートルも低く、作者たちは通常の洞窟として出入りできたのである。(図31・32) すなわち、当時の洞口の標高は80メートル以上だったことになる。そして現在の洞口は、約2万年前には、海岸から十数キロも離れていたことが分かる。約1万年前に、急激な温暖化のため、10年間で約6度の気温上昇が起こり、現在の海面になって以降、誰も立ち入ることができなかったが、プロのダイバーであったコスケール氏によってこそ、奇跡的にも発見されたのである。(図31) その状況は別稿に記したので、そちらを参照していただきたいが、プロのダイバーでなければ進入できない以上、発見後30年以上を経て、未だ実質的な調査は行われていない遺跡となっている。(注11)

図32の断面図を見ると、地表から約20メートル縦坑を掘れば、洞内に至れるわけで、一旦は計画されたが、1万年以上安定した環境下にあった洞内にどれだけの壊滅的な影響を与えるかは計り知れず、当然のことながら断念することになった。一般公開は不可能になったが、マルセイユ市はレプリカを展示する博物館を市内の中心部の海岸に建設することを決定し、それは2022年に公開された。図33は地下の閉鎖空間にワイヤーを組んで岩面の基礎を形成しようとしているところである。図34はデジタル的にある程度作られた画像に、アーティストがリタッチしている場面で、やはり、最終的には、人間のアナログ的な手が必要とされているということだろう。

「地中海・コスケール(Cosquer Méditerranée)」と名付けられた斬新な建築の施設は、上層部は資料展示の場であり、レプリカは地下に設営されている。(図35) しかし、そのコンセプトは極めて独自のものであり、観光地の中心部に立地していることもあり、多くの観覧者が見学できるような仕組みとなっている。見学者は5人収容可能な「探検トロッコ」に乗り、配布されたヘッドフォンから流れる解説を聞きながら、闇の中を進んでゆく。

(図36) そして停止した場所で前面にライトアップした部分が現れ、そこにレプリカの部分が見えるようになるのである。コスケールは、上記の状況から、制作されたであろう作品群の半数程度は水没して消え去ったと考えられ、図37が示すように、平面図では水面に島が浮かんでいるような現状である。作品の残存している主要な部分を切り取るようにレプリカ作製して、それを「探検トロッコ」の通路に図38のように配置して、それぞれの作品群を1分程度の限定された時間の中でしか見ることができず、強制的に次の部分に運ばれ、またそこで解説を聞きながらレプリカを眺めるという仕儀である。まさに、テーマパークのアトラクションそのものであり、観光地に設置されたレプリカであるからこそ、多くの観覧者を遅滞なく捌こうとする仕組みだろうと推察されるが、洞窟壁画のレプリカの展示方法としては、疑問を呈さざるを得ない。

遺跡そのものは入り口が海中にあり、複雑な形状の鍾乳洞の水中トンネルを150メートルも進まなければならず、命に関わるような危険な状況だが、そのレプリカはあまりにも安直なアクセス方法を採用しており、レプリカといえど、美術作品を鑑賞するのに果たして適切な設置なのかは検討する必要があるだろう。レプリカは同じマルセイユ市内に設置されていて、地中海沿岸の陽光などから風土を味わうこともできるが、環境の全く異なる都心の大聖堂のすぐ近くにある以上、やはり、観光振興が主な目的であることは否めないだろう。もちろん、百歩譲って、先史美術理解にはつながる試みだろうと評価するしかないのかもしれない。

ショーヴェ Chauvet

1994年にフランス南部、アルデシュ渓谷の崖の上に洞口が発見されたショーヴェ洞窟は、その広大な洞内に、ラスコーの何個分とも言われる作品群があり、近年で最も重要な発見となっている。図39は3万年以上前のホモ・サピエンスが引いたリズムカルな輪郭線で左方向に動くクマを表現しており、その完成度には驚かざるをえない。別稿でも紹介したが、この洞窟壁画は洞窟探検の専門家が発見し、洞内の地面もできる限り現状保存され、発見後四半世紀が過ぎても、最新の技術により調査研究が継続している。(注12) 発見以来、入洞は調査研究者に限られ、今後とも一般公開の予定はなく、地元のアルデシュ県は、観光振興の目的もあり、近くの荒地を切り拓いて、レプリカ展示施設を建設したのである。

オープンした2015年の当初は、発見された場所の近くの観光名所にちなんで、「弓橋洞(La Caverne du Pont d'Arc)」と名付けられたが、すぐにショーヴェ2と改称された。これは、ラスコーがそのレプリカを制作順にラ

スコーⅡからラスコー4という通称を採用しているのに倣ったと見なせる。オリジナルがショーヴェ1であり、そのレプリカがショーヴェ2であれば、その位置づけも分かりやすく、観光客にもアピールすることだろう。レプリカとその設置の詳細は、既に別稿で論じているので、それを参照していただきたいが、遺跡の近隣にあり、フランス南部を占める「中央山塊(Massif Central)」の東端にある石灰岩の台地と峡谷という荒々しい風土を味わいつつ、遙か3万年以前の作者たちにも思いをはせることができるだろう。(注13)

その他のレプリカ

以上、主要洞窟のレプリカを論じてきたが、それ以外にも、近年になっていくつかのレプリカ展示施設が公開されはじめています。2023年の本稿執筆現在で、筆者の未見の施設なので、以下に概要のみを記すことにします。

エカイン(Ekain)はスペイン北東部、バスク語が話されている地域で、1969年に発見された。図40は代表的な作品で、太く力強い輪郭線のみにより、右向きのクマの姿が表されている。一般には公開されたことがなく、地元の自治体は、オリジナルから600メートル離れた、村の郊外にレプリカ展示施設を2007年にオープンした。エカインベリ(Ekainberri)と名付けられた施設には、上記モンティニャック・ラスコーにあるレプリカ専門会社に作製を依頼した精巧なレプリカが設置されているとのことである。(注14)これは、オリジナルの近隣に、観光対策として作製された事例に分類できるだろう。

スペイン北西部のアストゥリアス県の山中にあるタベルガ村には、2007年に先史公園という名称の施設が開園した。この付近には洞窟壁画はないが、地元のアストゥリアス県に分布するティト・ブスティージョ(Tito Bustillo)とペーニャ・デ・カンダモ(Peña de Candamo)の主要部分のレプリカが設置された(注15)。図41はティト・ブスティージョの馬の頭部で、図42はペーニャ・デ・カンダモのウマの全身である。他に、上でも紹介した、フランスのニオーの「黒の部屋」のレプリカも設置されているのは、どういう意図があつたことだろうか。今後、現地調査も含めて、詳細に調査研究する予定である。

おわりに

本稿では、洞窟壁画のレプリカ設置の意義について見てきたが、大まかに分類すると、以下の表中のように、3種類になるだろう。

表 洞窟壁画レプリカ博物館の分類

① 一般公開されていない洞窟の近隣で、観光目的もあつて設置された例	ラスコー2(ル・トー先史公園も含む)およびラスコー4	ショーヴェ2	エカインベリ	地中海・コスケール
② 公開が制限されている洞窟壁画の近隣で、関連資料も含めて展示している例	アルタミラ博物館(新洞窟)	タラスコン先史公園(ニオー等)	タベルガ先史公園(ティト・ブスティージョ等)	
③ オリジナルから遠く離れた場所で、観光目的等で設置された例	スペイン国立考古学博物館(マドリード)(アルタミラ)	ドイツ博物館(ミュンヘン)(アルタミラ)	志摩スペイン村・ハビエル博物館(日本・三重県)(アルタミラ)	タベルガ先史公園(ニオー)

他に、世界各都市を巡展するという特殊な形態のラスコー3がある。

それぞれに目的があり、高額な経費と大変な労力を用いて、困難なレプリカを作製、設置しているわけだが、それも、人類が作り上げた最古の美術作品群を、オリジナルとして将来の世代に残しつつ、現在の私たちに、その真価を伝えようとする、尊い試みと評価できるだろう。

洞窟壁画は美術作品であり、オリジナルにアクセスできるのであれば、それに越したことはない。しかし、文化財保護の観点から、オリジナルの美術作品を直接経験することが難しくなった場合は、次善の策としてレプリカの役割が意義深いものになるのだろう。ただし、レプリカだけしか見ることができない場合は、自分が一体何に接しているのかを省察しながら見る必要があるだろう、と美術を専門に学ぶ者としては、考えざるを得ない。まさに、美術とは何か、芸術経験は可能か、そのオリジナルの存在意義は何か、レプリカに存在理由があるのか、

芸術とデジタル情報はどのような関係にあるのか、など極めて困難な問題が潜んでおり、現時点で一定の結論を得るのは難しいが、今後、実地調査を積み重ねつつ、理論的な議論も深化させて、より明確な見通しを立ててゆきたい、と考えているところである。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP23H00972「Web 併用体験型情報遺産展示を伴った未来志向教科架橋型情報教育体系の構築」（研究代表者：菊地章）の助成を受けたものです。



図1 アルタミラ洞窟壁画の天井画部分

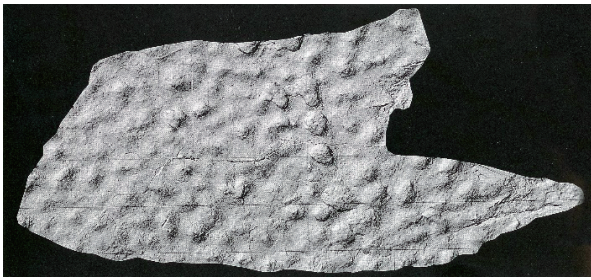


図2 レーザー計測により、図1の岩面部分の起伏のみを示している



図3 アルタミラ 左を向いて吼える牡ビゾン



図4 ドイツ博物館（ミュンヘン）のアルタミラ大天井画のレプリカ



図5 スペイン国立考古学博物館（マドリッド）前庭 アルタミラレプリカの入り口



図6 スペイン国立考古学博物館 アルタミラ大天井画のレプリカ



図7 志摩スペイン村ハビエル博物館（三重）アルタミラ大天井画のレプリカ



図8 スペイン国立アルタミラ博物館（サンティジャナ・デル・マール）外観

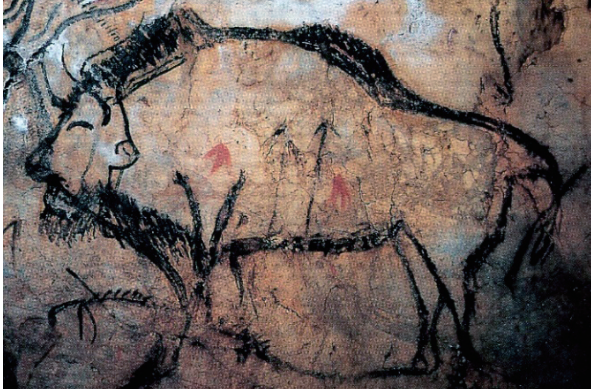


図9 ニオー洞窟壁画 記号のあるビゾン



図10 タラスコン先史公園

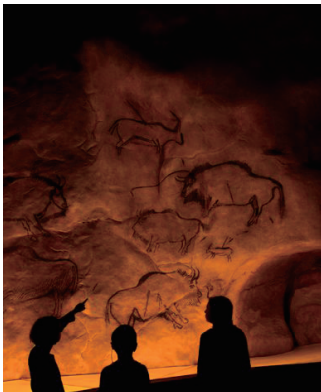


図11 タラスコン先史公園 ニオーのレプリカ

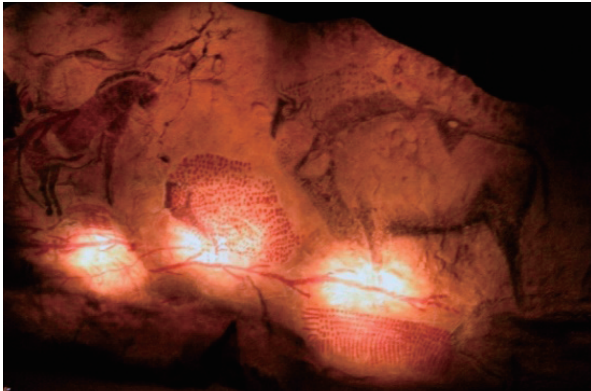


図12 タラスコン先史公園 マルスーラスのレプリカ



図13 「二角獣」ラスコー洞窟

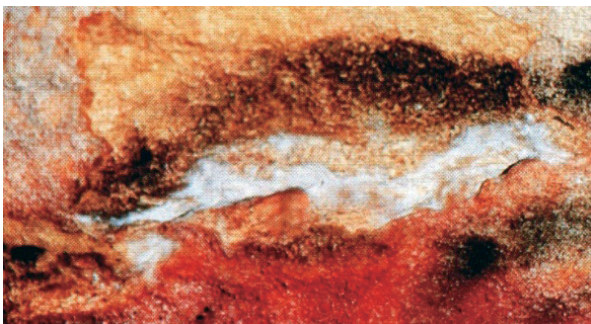


図14 図13の肩の部分「白い病気」が現れている



図15 ラスコーⅡの表示板

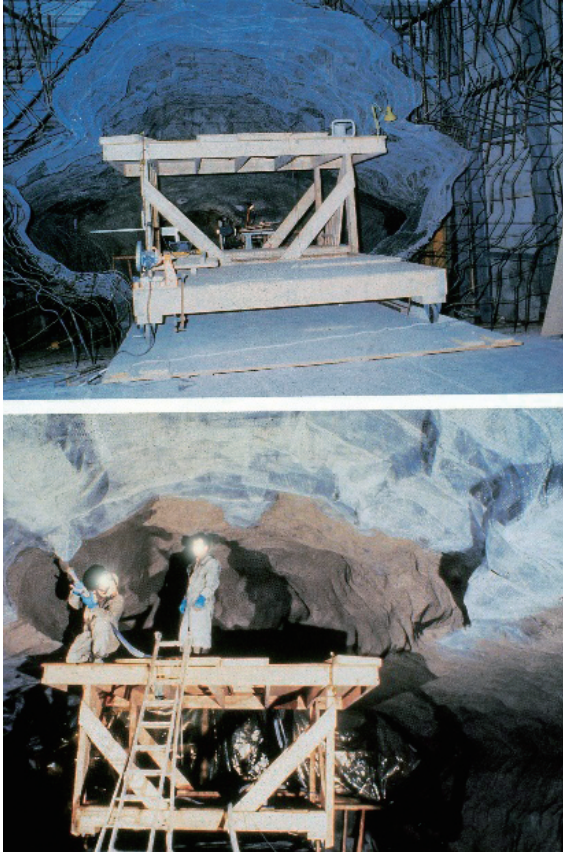


図16 ラスコーⅡ作製風景 鉄骨の枠にモルタルを吹き付けている



図17 ラスコーⅡ制作中のペイトラル

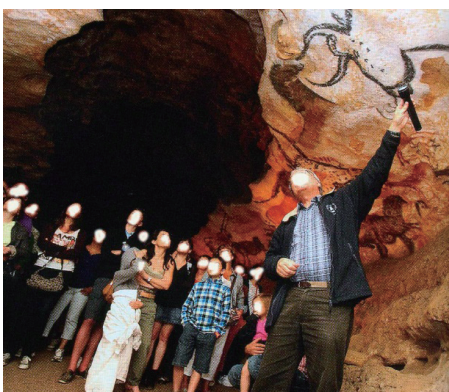


図18 現在のラスコーⅡ見学風景



図19 トー先史公園 ラスコウのレプリカ部分



図20 ビソン

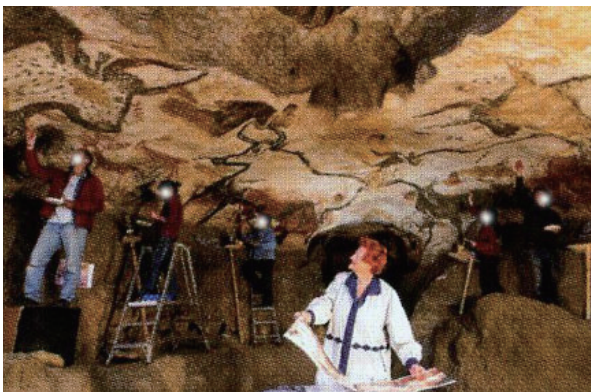


図21 ペイトラル主導のラスコーⅡ修復風景



図22 ラスコウ3 (パリ)



図23 九州国立博物館のリーフレット



図24 ラスコー洞窟の形状外観

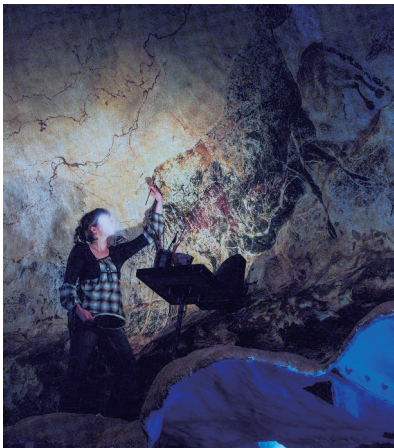


図25 ラスコー3 リタッチをしている制作風景



図26 ラスコー4 外観



図27 ラスコー4にレプリカを搬入する風景

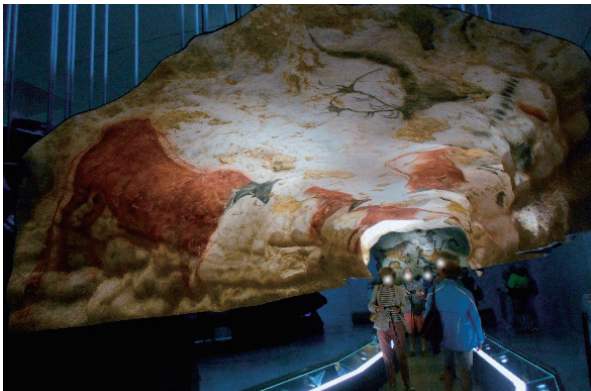


図28 ラスコー4 展示風景、天井からレプリカが吊り下げられている



図29 ラスコー4 マルチ・メディア 下のパネルを操作して、関心のある画像を示すことができる



図30 ラスコー4 顔料（実物）の展示



図31 約20000年前のコスケール付近の地勢図 コスケールは右中央の赤線を引いた箇所、水色は当時の陸地、下の部分の濃い青が海、上の淡い青は湖を示す

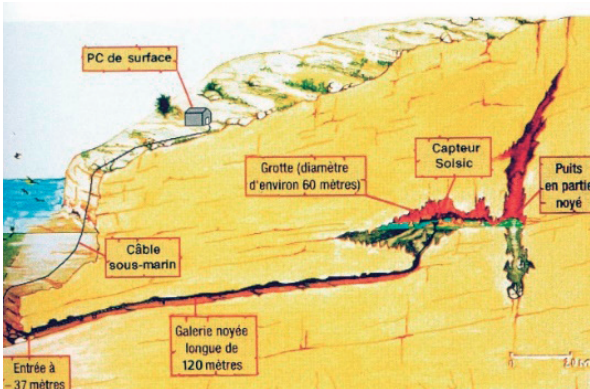


図32 コスケール洞窟断面図 ケーブルを洞内から伸ばして、陸地でモニターしていることを示す。右上の地面から縦坑突端への距離は約20メートル



図33 コスケール洞窟壁画レプリカ作製風景

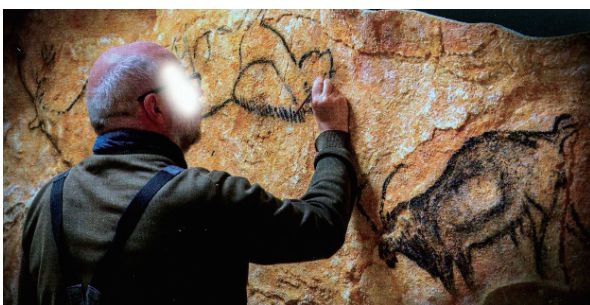


図34 コスケール洞窟壁画レプリカ リタッチするアーティスト



図35 「地中海・コスケール」外観



図36 「地中海・コスケール」の「module d'exploration (探検トロッコ)」

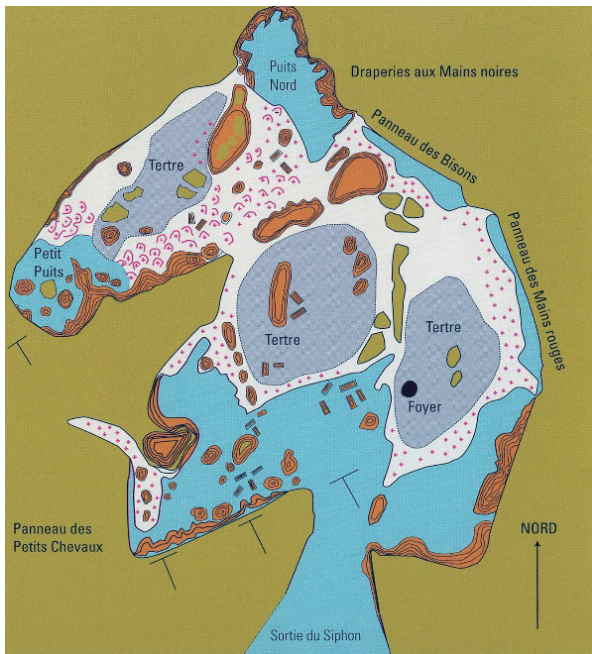


図37 コスケール洞窟の平面図

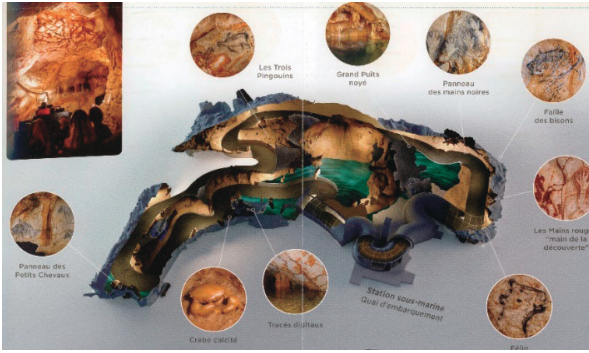


図38 「地中海・コスケール」のレプリカ配置 右下が「トロッコ」の乗降口で時計回りに1周する



図39 赤い輪郭線のクマ (ショーヴェ洞窟)



図40 太い輪郭線のクマ (エカイン洞窟)



図41 ウマの頭部 (ティト・ブステージョ洞窟)

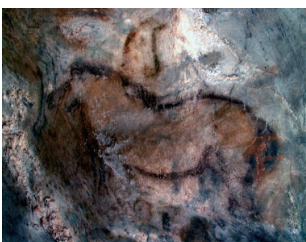


図42 ウマ (ペーニャ・デ・カンダモ洞窟)

注

- 1 小川 2006 6
- 2 ウェブページ <https://www.culturaydeporte.gob.es/mnaltamira/cueva-altamira/visita-a-la-cueva.html> の情報に基づく
- 3 ウェブページ [Altamira-Höhle-Deutsches Museum\(deutsches-museum.de\)](http://Altamira-Höhle-Deutsches-Museum.de)
- 4 小川 2022 381-391
- 5 Brunet et al. 1996 121
- 6 Lima 2012 33
- 7 Ibid. 61-71
- 8 Ibid. 73-91
- 9 海部 2017
- 10 Chassain et al. 2019 133
- 11 小川勝 2000 38-46。
なお、フランス文化省顧問であり、洞窟壁画研究の最高権威であるクロット(Jean Clottes 1933-)はコスケール洞窟だけに入洞できる特別な潜水免許を取得し、2002年に唯一の専門家として入洞している。
- 12 Delannoy et al. 2020
- 13 小川 2021 302-311
- 14 ウェブページ Ekainberri: Museo de la cueva Ekain, Zestoa, País Vasco
- 15 ウェブページ PARQUE DE LA PREHISTORIA-Página web oficial del Parque de la Prehistoria.

図版出典

- 1 Lasheras 2003 pp.240 fig.25
- 2 ibid. pp.232 fig.13
- 3, 40, 41, 42 ゴンサーレス2004 データベース
- 4 ウェブページ [Altamira-Höhle-Deutsches Museum\(deutsches-museum.de\)](http://Altamira-Höhle-Deutsches-Museum.de)
- 5, 6, 8, 10, 12, 15, 22, 24, 26, 28, 29, 30, 35 筆者
- 7 ウェブページ [ハビエル城博物館 | 伊勢志摩近鉄リゾート志摩スペイン村\(parque-net.com\)](http://ハビエル城博物館 | 伊勢志摩近鉄リゾート志摩スペイン村(parque-net.com))
- 9 Clottes 1995 pp.103 fig.116
- 11 ウェブページ [Parc de la Préhistoire, Tarascon sur Ariège, Visite, Tarifs et Billets\(sites-touristiques-ariège.fr\)](http://Parc de la Préhistoire, Tarascon sur Ariège, Visite, Tarifs et Billets(sites-touristiques-ariège.fr))
- 13 Chassain et al. 2019 pp.44
- 14 Brunet et al. 1996 pp.121 fig. 83
- 16 Lima 2012 pp.30 figs.14 et 15
- 17 ibid. pp.25 fig.21
- 18 Chassain et al. op.cit. pp.106
- 19 ウェブページ [Le Parc du Thot\(parc-thot.fr\)](http://Le Parc du Thot(parc-thot.fr))
- 20 ibid.
- 21 Lima op.cit. pp.70 fig.48
- 23 ウェブページ九州国立博物館 | 特別展「世界遺産 ラスコール展 クロマニヨン人が見た世界」(kyuhaku.jp)
- 25 Lima op.cit. 2012 pp.81 fig.58
- 27 Chassain et al. op.cit. pp.128
- 31 Clottes et al. 2005 pp.53 fig.31
- 32 Clottes et al. op.cit. pp.23 fig.10
- 33 Cosquer Méditerranée 2022 pp.40
- 34 Cosquer Méditerranée 2023 dépliant
- 36 Cosquer Méditerranée 2022 op.cit. pp.54
- 37 Clottes et al. op.cit. pp.53 fig.32

38 Cosquer Méditerranée 2023 op.cit.

39 Delannoy et al. 2020 pp.196 fig.143

参考文献

Brunet, J & Vouvé, J(eds.)1996 La Conservation des grottes ornées, CNRS Éditions, Paris, 121

Chassain, H. & Tauxe D., 2019 La grande histoire de Lascaux: de la préhistoire au XXIe siècle Editions Sud-Ouest
Bordeaux 133

Clottes, J.1995 *Cavernes de Niaux: art préhistorique en Ariège* Seuil , Paris

Clottes, J., Courtin, J. et Vanrell, R.2005 *Cosquer Redécouvert* Seuil Paris

Cosquer Méditerranée: la grotte préhistorique sous la mer 2022 Beaux Arts Paris

Cosquer Méditerranée: la grotte préhistorique sous la mer 2023 dépliant

Delannoy, Jean-Jacques et al. 2020 Monographie de la grotte Chauvet-Pont d'Arc vol.I Atlas Maison des sciences
de l'homme 384

Lasheras, J.A.(ed.)Redescubrir Altamira(Turner, Madrid, 2003) 232

Lima,P. 2012 Les Méta-Morphoses de Lascaux: L'Atelier des Artistes, de la Préhistoire a nos jours Synops,
Montélimar, 33

小川勝 2000 「フランス・コスケールの洞窟壁画と旧石器時代美術研究の問題」『古代文化』 第52巻 2月号
38-46。

2006 「洞窟壁画における『統合』：事例研究。スペイン・アルラミラ洞窟」『若山映子先生 ご退職記
念論文集』（大阪大学文学研究科・西洋美術史研究室）6 -14

2021 「ショーヴェの洞窟壁画再論：発見25年を経て」『鳴門教育大学研究紀要』第36巻 302-311

2022 「ラスコー洞窟壁画の芸術性：綿密な記述による」『鳴門教育大学研究紀要』第37巻 381-391

海部陽介（監修）2017『世界遺産 ラスコー展 図録』毎日新聞社 TBS テレビ

ゴンサーレス・サインス C.(監修) 2004データベース 『先史人類の洞窟美術－北スペイン編』 テクネ

Research and study of a museum displaying replicas of parietal art

OGAWA Masaru

Replicas of Palaeolithic Parietal art have been made and publicly opened in recent years. Original cave paintings and engravings should have been conserved for the future generations, so we must admit that some caves should be closed to the audience. Significance of Replicas have been increased more and more, and in this article, we are to examine many examples of Altamira, Niaux, Lascaux, Cosquer and Chauvet. Each Replicas have its proper histories and circumstances, and we have pointed out the possibility of art reproductions.